# NetBackup™ Self Service インストールガイド

10.1.1

マニュアルバージョン 1

VERITAS™

# NetBackup™ Self Service インストールガイド

最終更新日: 2022-12-20

## 法的通知と登録商標

Copyright © 2022 Veritas Technologies LLC. All rights reserved.

Veritas、Veritas ロゴ、NetBackup は、Veritas Technologies LLC または関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。その他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

この製品には、Veritas 社がサードパーティへの帰属を示す必要があるサードパーティ製ソフトウェア (「サードパーティ製プログラム」) が含まれる場合があります。サードパーティプログラムの一部は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスで提供されます。本ソフトウェアに含まれる本使用許諾契約は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスでお客様が有する権利または義務を変更しないものとします。このVeritas製品に付属するサードパーティの法的通知文書は次の場所で入手できます。

https://www.veritas.com/about/legal/license-agreements

本書に記載されている製品は、その使用、コピー、頒布、逆コンパイルおよびリバースエンジニアリングを制限するライセンスに基づいて頒布されます。Veritas Technologies LLC からの書面による許可なく本書を複製することはできません。

本書は、現状のままで提供されるものであり、その商品性、特定目的への適合性、または不侵害の暗黙的な保証を含む、明示的あるいは暗黙的な条件、表明、および保証はすべて免責されるものとします。ただし、これらの免責が法的に無効であるとされる場合を除きます。Veritas Technologies LLC およびその関連会社は、本書の提供、パフォーマンスまたは使用に関連する付随的または間接的損害に対して、一切責任を負わないものとします。本書に記載の情報は、予告なく変更される場合があります。

ライセンスソフトウェアおよび文書は、FAR 12.212 に定義される商用コンピュータソフトウェアと見なされ、Veritasがオンプレミスまたはホスト型サービスとして提供するかを問わず、必要に応じて FAR 52.227-19「商用コンピュータソフトウェア - 制限される権利 (Commercial Computer Software - Restricted Rights)」、DFARS 227.7202「商用コンピュータソフトウェアおよび商用コンピュータソフトウェア文書 (Commercial Computer Software and Commercial Computer Software Documentation)」、およびそれらの後継の規制に定める制限される権利の対象となります。米国政府によるライセンス対象ソフトウェアおよび資料の使用、修正、複製のリリース、実演、表示または開示は、本使用許諾契約の条項に従ってのみ行われるものとします。

Veritas Technologies LLC
2625 Augustine Drive
Santa Clara, CA 95054

http://www.veritas.com

## テクニカルサポート

テクニカルサポートはグローバルにサポートセンターを管理しています。すべてのサポートサービスは、サポート契約と現在のエンタープライズテクニカルサポートポリシーに応じて提供されます。サ

ポート内容およびテクニカルサポートの利用方法に関する情報については、次の Web サイトにアクセスしてください。

https://www.veritas.com/support

次の URL で Veritas Account の情報を管理できます。

https://my.veritas.com

現在のサポート契約についてご不明な点がある場合は、次に示すお住まいの地域のサポート契約管理チームに電子メールでお問い合わせください。

| | |
|---|---|
| 世界共通 (日本を除く) | CustomerCare@veritas.com |
| 日本 | CustomerCare_Japan@veritas.com |

## マニュアル

マニュアルの最新バージョンがあることを確認してください。各マニュアルには、2 ページ目に最終更新日が記載されています。最新のマニュアルは、Veritasの Web サイトで入手できます。

https://sort.veritas.com/documents

## マニュアルに対するご意見

お客様のご意見は弊社の財産です。改善点のご指摘やマニュアルの誤謬脱漏などの報告をお願いします。その際には、マニュアルのタイトル、バージョン、章タイトル、セクションタイトルも合わせてご報告ください。ご意見は次のアドレスに送信してください。

NB.docs@veritas.com

次の Veritas コミュニティサイトでマニュアルの情報を参照したり、質問したりすることもできます。

http://www.veritas.com/community/

## Veritas Services and Operations Readiness Tools (SORT)

Veritas SORT (Service and Operations Readiness Tools) は、特定の時間がかかる管理タスクを自動化および簡素化するための情報とツールを提供する Web サイトです。製品によって異なりますが、SORT はインストールとアップグレードの準備、データセンターにおけるリスクの識別、および運用効率の向上を支援します。SORT がお客様の製品に提供できるサービスとツールについては、次のデータシートを参照してください。

https://sort.veritas.com/data/support/SORT_Data_Sheet.pdf

# 目次


第 1 章 概要 ..... 6

Self Service のコンポーネントについて ..... 6

第 2 章 前提条件 ..... 8

前提条件について ..... 8

第 3 章 インストール ..... 10

インストールの概要 ..... 10
IIS に関する考慮事項 ..... 11
ポータルのインストール ..... 12
アダプタのインストール ..... 15
サイレントインストール ..... 16
検証 ..... 17
インストールされるコンポーネント ..... 17

第 4 章 アップグレード ..... 21

現在の環境の構成の確認 ..... 21
アップグレードの準備 ..... 24
ポータルのアップグレード ..... 25
アダプタのアップグレード ..... 26
サイレントアップグレード ..... 27
検証 ..... 28
アップグレード後の再同期 ..... 30
アップグレード後の手順 ..... 30
ロールバック ..... 31

第 5 章 インストール後の検証 ..... 32

インストール後の検証について ..... 32
目視での確認 ..... 32
構成のチェック ..... 33
IIS 構成のチェック ..... 34
Windows サービス ..... 35

第 6 章 アンインストール ..... 36
NetBackup Self Service のアンインストール ..... 36
付録 A ソフトウェア要件 ..... 37
Self Service 向けの NetBackup ソフトウェア要件 ..... 37
付録 B トラブルシューティング ..... 39
PowerShell 実行ポリシーについて ..... 39
失ったアプリケーションキーのリカバリ ..... 41
付録 C デフォルトの HTTPS 構成 ..... 43
デフォルトの HTTPS 構成について ..... 43
付録 D 負荷分散インストール ..... 44
負荷分散インストールについて ..... 44
付録 E イメージのアップロードのカスタマイズ ..... 46
イメージのアップロードのカスタマイズについて ..... 46
付録 F データベースをアップグレードするための低いデータベースアクセス権 ..... 48
データベースをアップグレードするための低いデータベースアクセス権 ..... 48

1

# 概要

この章では以下の項目について説明しています。

- Self Service のコンポーネントについて

## Self Service のコンポーネントについて

NetBackup Self Service をインストールするには 2 つのインストーラが必要です。

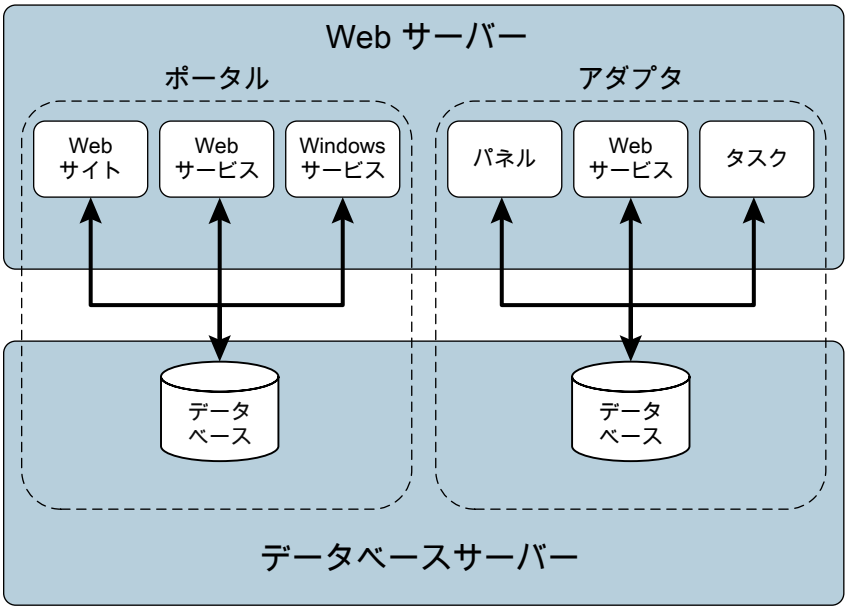
- NetBackup Self Service Portal 10.1.1.exe
- NetBackup Self Service Adapter 10.1.1.exe

インストーラは合計 8 つのコンポーネントをインストールします。

- ポータル
  - Web サイト
  - Web サービス
  - Windows サービス
  - データベース
- アダプタ
  - パネル
  - Web サービス
  - タスク
  - データベース

コンポーネントはさまざまな方法で配布できますが、このガイドではサーバー 2 台へのインストールについて説明します。Web サイト、Web サービス、Windows サービスをホストする Web サーバーと、データベースをホストするデータベースサーバーです。

図 1-1 サーバー 2 台へのインストール




追加のアドオンの 1 つを使用して、NetBackup Self Service ソリューションを拡張できます。VOX (Veritas Open Exchange) で、詳細情報やダウンロードの詳細を確認できます。次のリンクから特定の投稿にアクセスできます。

- iOS と Android の両方で利用可能なモバイル用 Veritas NetBackup Self Service アプリ
  https://tinyurl.com/y7g56u2r
- Microsoft Teams 用 Veritas NetBackup Self Service ボット
  https://tinyurl.com/ycqkhfzh
- Slack 用 Veritas NetBackup Self Service アプリ
  https://tinyurl.com/yc5snw7z
- ServiceNow 用 Veritas NetBackup Self Service アプリ
  https://tinyurl.com/yadg2obh
- VMware vRealize Automation 用 Veritas NetBackup Self Service プラグイン
  https://tinyurl.com/ybldbpcx
- VMware vCloud Director 用 Veritas NetBackup Self Service プラグイン
  https://tinyurl.com/y77f68jv

2

# 前提条件

この章では以下の項目について説明しています。


- 前提条件について


## 前提条件について

NetBackup Self Service をインストールするユーザーには、SQL Server、Windows サービス、IIS (インターネットインフォメーションサービス) についての知識が必要です。

次の Windows プラットフォームに NetBackup Self Service をインストールできます。

- Windows Server 2012 R2
- Windows Server 2016
- Windows Server 2019

---

**メモ:** オペレーティングシステムに最新の Service Pack を適用します。

---

各コンポーネントの前提条件は次のとおりです。

**表 2-1**

| コンポーネント | 要件 |
|---|---|
| データベース | ■ Microsoft SQL Server 2012、2014、2016、または 2017<br>■ Amazon RDS 上の Azure SQL Database または Microsoft SQL Server<br>■ データ用に 5 GB 以上、ログ用に 2 GB 以上の空きディスク容量 |

| コンポーネント | 要件 |
| --- | --- |
| Web サイト、Web サービス、Windows サービス | ■ Microsoft .NET Framework バージョン 4.7.2<br>■ コンフィギュレータによってインストール済みの IIS<br>■ 標準の Windows インストールに含まれる Windows PowerShell 3.0<br>■ SMTP サーバーへのアクセス<br>■ 1 GB 以上の空きディスク容量 |

3

# インストール

この章では以下の項目について説明しています。


- インストールの概要
- IIS に関する考慮事項
- ポータルのインストール
- アダプタのインストール
- サイレントインストール
- 検証
- インストールされるコンポーネント


## インストールの概要

Self Service のインストールには複数の段階があります。.msi ファイルまたはサイレントインストール方式のいずれかを使用して、Self Service をインストールできます。表 3-1 に、処理の概要を示します。また、この章ではさまざまな Self Service コンポーネントがインストールされる場所について詳しく説明します。

**表 3-1　　インストールの概要**

| 手順 | 追加情報 |
|---|---|
| IIS に関する考慮事項 | p.11 の「IIS に関する考慮事項」を参照してください。 |
| HTTPS | p.43 の「デフォルトの HTTPS 構成について」を参照してください。 |
| ポータルのインストール | p.12 の「ポータルのインストール」を参照してください。 |

| 手順 | 追加情報 |
|---|---|
| アダプタのインストール | p.15 の「アダプタのインストール」を参照してください。 |
| サイレントインストール | p.16 の「サイレントインストール」を参照してください。 |
| 検証 | p.17 の「検証」を参照してください。 |

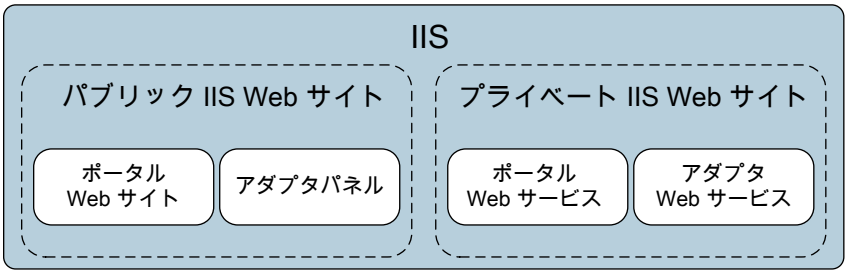
# IIS に関する考慮事項

インストールを開始する前に、IIS の構成方法について考慮する必要があります。IIS では 4 つのコンポーネントがインストールされます。

- ポータル Web サイト
- ポータル Web サービス
- アダプタページ
- アダプタ Web サービス

これらのコンポーネントに対するセキュリティ上の考慮事項は異なります。ポータル Web サイトとアダプタページは、システムのすべてのユーザーが表示できる必要があります。この要件は、Web サイトをパブリックインターネットで公開する場合があることを意味します。ポータル Web サービスとアダプタ Web サービスは統合ポイントを提供します。これらのページにアクセスできる必要があるのは内部システムだけです。

2 つの IIS Web サイトをコンポーネント用に作成する構成をお勧めします。1 つ目の IIS Web サイトでは、ポータル Web サイトとアダプタページをホストします。2 つ目の IIS Web サイトでは、ポータル Web サービスとアダプタ Web サービスをホストします。




IIS で 2 つの Web サイトを作成します。1 つ目は、ポータルとアダプタのパネルをホストするパブリック向け Web サイトです。2 つ目は、Web サービスをホストするプライベート Web サイトです。IIS Web サイトのセキュリティを構成します。プライベート IIS Web サイトの可視性を必ず制限して、パブリックインターネットで公開されないようにしてください。

10.0 リリース以降、NetBackup Self Service は対応する証明書を使用してポート 443 でデフォルトのバインドを作成します。

NetBackup Self Service にパブリック Web サイトとプライベート Web サイトの両方がある場合、NetBackup Self Service はポート 443 へのデフォルトのバインドを持つ 1 つ目の Web サイトを作成します。NetBackup Self Service は、ポート 444 へのデフォルトのバインドと対応する証明書で、2 つ目の Web サイトを作成します。

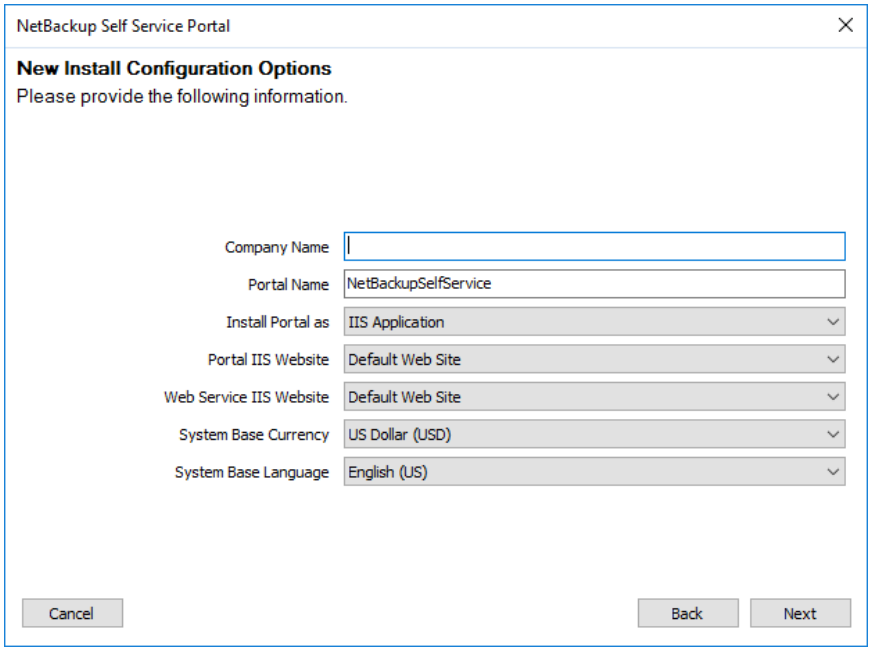
# ポータルのインストール

このセクションでは、NetBackup Self Service ポータルのインストールについて説明します。インストーラを手動で実行するか、サイレントインストーラを使用できます。サイレントインストーラは、ユーザー入力なしでインストールを続行します。

ポータルをインストールするには

1. NetBackup Self Service アダプタの前に NetBackup Self Service ポータルをインストールします。
2. Web サーバーに NetBackup Self Service ポータルをインストールします。ポータルのインストールでは、リモートマシンにデータベースが作成されます。
3. `NetBackup Self Service Portal 10.1.1.exe` を実行します。

   インストーラが実行され、インストールがコンピュータにコピーされます。インストールが完了すると、コンフィギュレータが起動されます。
4. コンフィギュレータで、[新しい NetBackup Self Service ポータルのインストール (Install a New NetBackup Self Service Portal)]を選択します。
5. コンポーネント画面で、すべてのオプションが選択されていることを確認して[次へ (Next)]を選択します。
6. 検証画面で IIS が正しく構成されていることの確認が実行されます。
7. [新しいインストール構成オプション (New Install Configuration Options)] ダイアログを使用してサイトの構成を指定します。




- ［会社名 (Company Name)］は会社の名前です。
- ［ポータル名 (Portal Name)］フィールドにはサイトの名前を定義します。インストーラが作成する IIS アプリケーションと Windows サービスの名前を作成するために使用されます。インストーラの実行後は、ポータル名を変更できません。［ポータル名 (Portal Name)］は慎重に選んでください。
- ［ポータルのインストール先 (Install Portal as)］フィールドにより、IIS アプリケーションまたは Web サイトの root 直下にメインの Web サイトをインストールできます。IIS アプリケーションにインストールする場合、URL は `www.example.com/portalname` のようになります。ここで、*portalname* は［ポータル名 (Portal Name)］です。IIS Web サイトの root にインストールする場合、Web サイトの URL は `www.example.com` のようになります。
  IIS アプリケーションにインストールする利点は、他の Web サイトが Web サーバー上に共存できることです。Web サイトの root にインストールする利点は、URL が簡潔になることです。
- コンポーネントをインストールする IIS Web サイトを指定します。ポータルと Web サービスに使用する IIS Web サイトを選択します。Veritas では、2 つの Web サイトを使用することをお勧めします。ポータルをホストするには［パブリック (Public)］を、Web サービスをホストするには［プライベート (Private)］を使用します。

- ［システムの基本通貨 (System Base Currency)］では、Self Service で使用する通貨の種類を定義します。
- ［システムの基本言語 (System Base Language)］では、ユーザーインターフェースに表示される言語を定義します。

**8** ［データベースインストーラの接続 (Database Installer Connection)］ダイアログで、作成するデータベースに関する情報を入力します。データベースの作成時に使用するクレデンシャルを入力します。Veritas では、デフォルトのデータベース名 (［ポータル名 (Portal Name)］と同じ) を保持することをお勧めします。入力するクレデンシャルが存在し、データベースインスタンスに対する `sysadmin` アクセス権がある必要があります。インストーラはデータベースを作成するためにこれらのクレデンシャルを使用します。

**9** ポータル、Web サービス、Windows サービスがデータベースへの接続に使用するユーザークレデンシャルを入力します。このデータベースユーザーはインストール処理の一部として作成され、アプリケーションがデータベースに接続するために使用されます。

**10** ［アプリケーションセキュリティ (Application Security)］ダイアログで新しい［アプリケーションキー (Application Key)］を生成します。

［アプリケーションキー (Application Key)］は、システムでサードパーティのパスワードの暗号化に使用されます。たとえば、アダプタには他のシステムに接続するためのクレデンシャルが含まれています。これらの暗号化にアプリケーションキーが使用されます。新しいシステムへのインストールの場合は、［キーの生成 (Generate Key)］をクリックして新しいキーを作成します。既存のシステムの新しいコンポーネントに対するインストールの場合は、元のインストールのキーをボックスに貼り付けます。

システムの負荷分散のため、2 つ目の Web サイトをインストールする場合は、アプリケーションキーのコピーを保持します。2 つ目の Web サイトをインストールする際は、同じアプリケーションキーを使用する必要があります。

---

**注意:** アプリケーションキーは、ユーザーのログオンクレデンシャルの暗号化には使用されません。

---

**11** 検証画面でデータベースクレデンシャルが正しいかの確認が実行されます。

12 確認画面が表示されます。詳細が正しいか確認し、[インストール (Install)]をクリックします。

13 ポータルのインストールと構成が完了したら、Web サイトにログインします。

コンフィギュレータの最後のページに、Web サイトの URL が表示されます。最初のログオン用のクレデンシャルは次のとおりです。

ユーザー ID: `Admin`。ユーザー名では大文字と小文字は区別されません。

パスワード: `password`。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。最初のログオン時にパスワードを変更する必要があります。

この最終画面にある URL のコピーを保持してください。この URL を使用してシステムに接続します。

# アダプタのインストール

このセクションでは、NetBackup Self Service アダプタのインストールについて説明します。

**アダプタをインストールするには**

1 Web サーバーから、`NetBackup Self Service Adapter 10.1.1.exe` を実行します。インストーラが実行され、インストールファイルがディスクにコピーされます。完了すると、コンフィギュレータが起動されます。

2 [インストールの選択 (Select Installation)]ダイアログボックスから[NetBackup Self Service アダプタのインストール (Install NetBackup Self Service Adapter)]を選択します。

3 [コンポーネントの選択 (Select Components)]ダイアログで、すべてのオプションが選択されていることを確認して[次へ (Next)]を選択します。

4 検証画面が実行され、PowerShell 3.0 以降がインストールされているか確認されます。

5 [ポータル Web サービスの選択 (Select Portal Web Service)]画面で、システムの[ポータル Web サービスの仮想ルート (Portal Web Service Virtual Root)]を指定します。ポータルの Web サービスを介して、アダプタがポータルと通信します。

6 [IIS Web サイトの選択 (Select IIS Websites)]ダイアログで、アダプタページとアダプタサービスをインストールする IIS Web サイトを選択します。Veritas では、ページをパブリックサイトに、サービスをプライベートサイトに設定することをお勧めします。

7 ［データベースインストーラの接続 (Database Installer Connection)］ダイアログを使用して、アダプタのデータベースが作成されます。データベースが作成されるデータベースサーバーを選択し、データベースの名前を選択します。Veritas では、［サイト名 (Site Name)］から導出されるデフォルトのデータベース名を受け入れることをお勧めします。入力されたクレデンシャルを使用してデータベースが作成されます。指定するユーザーには、sysadmin データベース権限が必要です。このユーザーはコンフィギュレータが有効な場合にのみ使用され、クレデンシャルは保存されません。

8 ［アプリケーション接続 (Application Connection)］ダイアログで、アダプタページおよびサービスがデータベースに接続するために使用するデータベースユーザーを作成します。

9 検証画面でデータベースクレデンシャルが正しいかの確認が実行されます。

10 確認画面が表示されます。詳細が正しい場合は、［インストール (Install)］をクリックします。

11 インストールが実行されます。

# サイレントインストール

NetBackup Self Service をインストールしようとする前に、現在のコンピュータが NetBackup Self Service のすべてのインストール要件を満たしていることを確認します。これらの要件には、NetBackup Self Service の古いバージョンがインストールされていないことの確認が含まれます。

**NetBackup Self Service をサイレントインストールするには:**

1 *install_directory*¥Silent Files¥Install.db.config ファイルを編集して、NetBackup Self Service データベースに接続するために必要な情報を入力します。

2 Install.db.config ファイルの CompanyName オプションには、会社名を入力するか、デフォルト値のままにします。

3 サイレントインストールを使用して NetBackup Self Service を再インストールする場合は、Install.db.config ファイルの OverrideNSSDBUsersIfExists オプションを使用します。

次に該当する場合は、サイレントインストール用に OverrideNSSDBUsersIfExists オプションを True に設定します。

- NetBackup Self Service の以前のバージョンをアンインストールした。
- データベース (NetBackupSelfService と NetBackupSelfServiceNetBackupAdapter) を削除した。

- NetBackup Self Service によって作成された 2 つのログイン (NetBackupSelfServiceUser と NetBackupSelfServiceNetbackupAdapterUser) の削除に失敗した。

上記の条件に該当する場合、`OverrideNSSDBUsersIfExists` オプションが True に設定されていないと、サイレントインストールは失敗します。

4 `Install.db.config` ファイルの残りのオプションは、SQL Server に接続するために使用されます。`sysadmin` グループのメンバーである ID を使用するようにこれらを構成します。

5 *install_directory*`¥Silent Files¥SilentInstall.bat` を右クリックし、[管理者として実行]を選択します。インストールが開始され、コマンドラインウィンドウにインストールの進捗状況が表示されます。インストールが完了すると、コマンドラインウィンドウが閉じます。

コマンドラインからサイレントインストールを直接起動することもできます。コマンドプロンプトを開き、`SilentInstall.bat` ファイルを含むディレクトリに変更してから、`SilentInstall.bat` を実行します。

インストールログファイル `log_`*timestamp*`_install.log` が、`SilentInstall.bat` ファイルと同じディレクトリに生成されます。このファイルでインストールの結果を確認します。インストールが失敗した場合は、インストールログにトラブルシューティング情報が記載されています。

# 検証

インストールが完了したら、ポータルのインストールの最終画面にある URL とクレデンシャルを使用して Web サイトにログインします。インストールを検証して初期セットアップを実行する方法に関する詳細情報を参照できます。

p.32 の「インストール後の検証について」を参照してください。

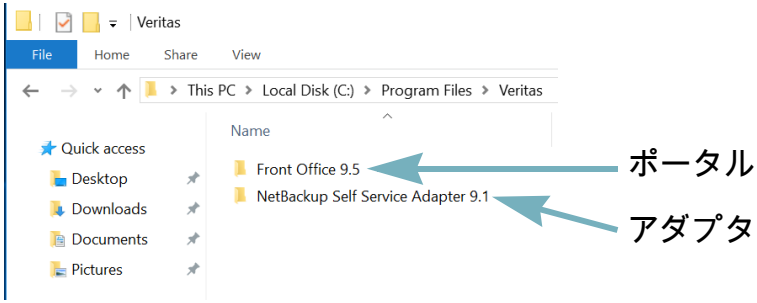
# インストールされるコンポーネント

このセクションでは、NetBackup Self Service のデフォルトインストールの結果を示します。インストールされているコンポーネントと、コンポーネントがインストールされている場所を確認できます。

## ファイルシステム

ポータルとアダプタは `C:¥Program Files¥Veritas` にインストールされます。

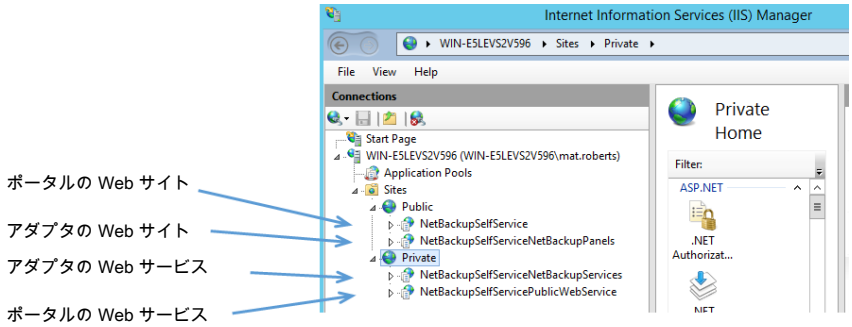
- ポータル: `C:¥Program Files¥Veritas¥Front Office` *version_number*
- アダプタ: `C:¥Program Files¥Veritas¥NetBackup Self Service Adapter` *version_number*




## IIS

IIS では 4 つのコンポーネントがインストールされます。推奨される構成を図に示します。この構成では、Web ページをホストするパブリックサイトと Web サービスをホストするプライベートサイトという 2 つの IIS Web サイトが作成されます。

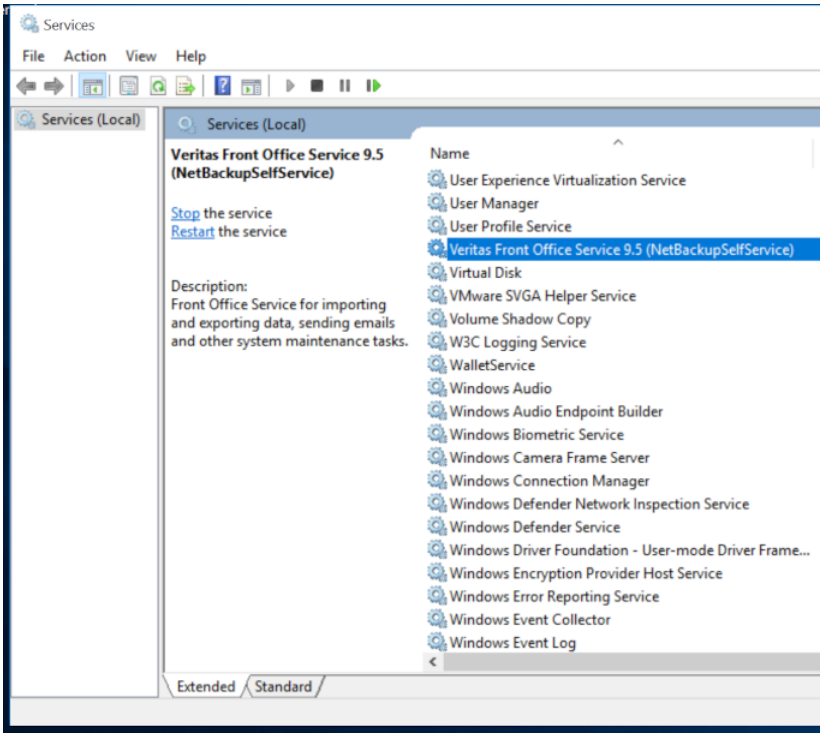
**図 3-1** インストールされる IIS コンポーネント




## Windows サービス

ポータルは Windows サービスをインストールします。

図 **3-2** ポータルの Windows サービス (Veritas Front Office Service)

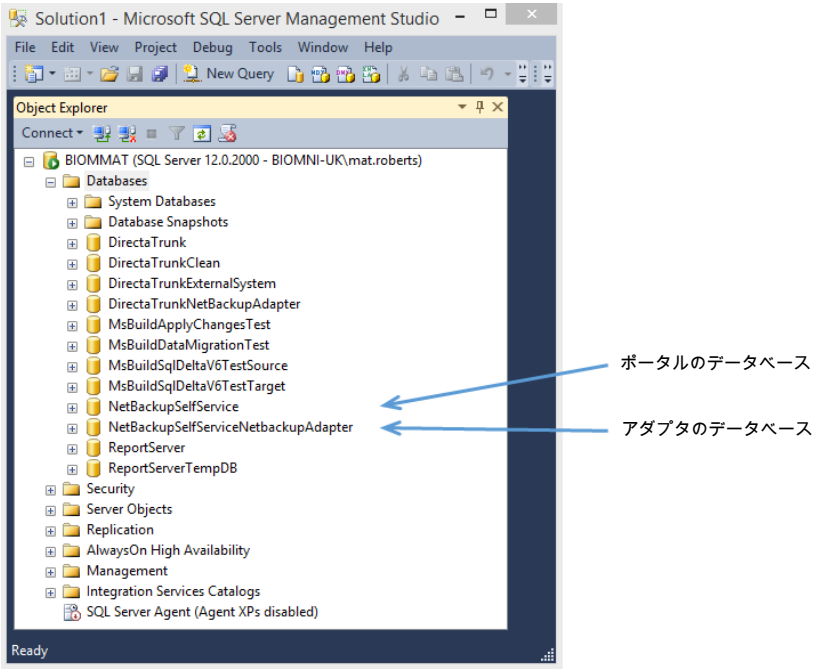



## データベース

2 つのデータベースが作成されます。

- ポータルのデータベース: NetBackupSelfService
- アダプタのデータベース: NetBackupSelfServiceNetBackupAdapter

**図 3-3** Self Service データベース



4

# アップグレード

この章では以下の項目について説明しています。


- 現在の環境の構成の確認
- アップグレードの準備
- ポータルのアップグレード
- アダプタのアップグレード
- サイレントアップグレード
- 検証
- アップグレード後の再同期
- アップグレード後の手順
- ロールバック


## 現在の環境の構成の確認

アップグレードを開始する前に、既存のインストールを確認します。Self Service には、通常 2 台のサーバーに分散される 8 つのコンポーネントがあります。

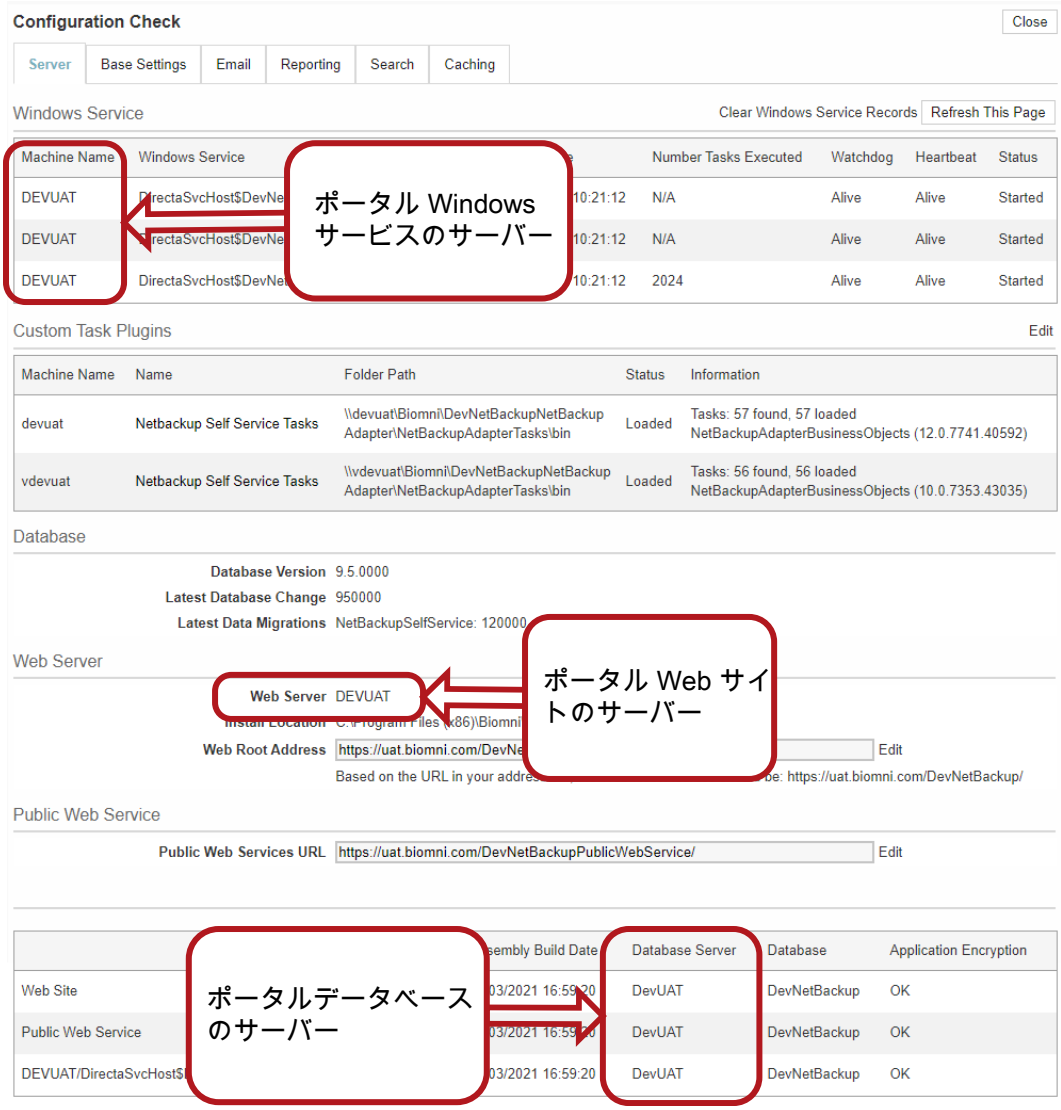
**表 4-1　一般的な Self Service の構成**

| 場所 | コンポーネント |
|---|---|
| IIS サーバー | ■ ポータル Web サイト<br>■ ポータルパブリック Web サービス<br>■ アダプタパネル<br>■ アダプタ Web サービス |

| 場所 | コンポーネント |
| --- | --- |
| Windows サービス | ■ ポータル Windows サービス<br>■ アダプタタスク (Self Service 7.7.3 以降) |
| SQL Server | ■ ポータルデータベース<br>■ アダプタデータベース |

NetBackup Self Service から環境内のコンポーネントを特定できます。

- Self Service Web サイトの［構成の確認 (Configuration Check)］ページを調べて、ポータルコンポーネントがインストールされているサーバーを特定します。
  Self Service にログインし、［構成の確認 (Configuration Check)］ページ (［管理 (Admin)］、［サポート (Support)］、［構成の確認 (Configuration Check)］) に移動します。




コンポーネントがインストールされているサーバーを特定します。

- IIS コンポーネントを特定します。
  Web サーバーにログインし、IIS (インターネットインフォメーションサービス) マネージャを開きます。
  サイトを参照し、表 4-1 に一覧表示されている 4 つの IIS コンポーネントを特定します。
  p.18 の 図 3-1 を参照してください。

- Windows サービスを特定します。
  Windows サービスでサーバーにログインします。Self Service のデフォルトインストールでは、このサービスは Web サーバーにあります。
  [サービス (Services)]を開き、[ポータル Windows サービス (Portal Windows Service)]を見つけます。
  p.19 の 図 3-2 を参照してください。
- データベースを特定します。
  Microsoft SQL Server Management Studio を開き、データベースサーバーに接続します。
  表 4-1 に一覧表示されている 2 つのデータベースを特定します。
  p.17 の「インストールされるコンポーネント」を参照してください。

# アップグレードの準備

アップグレードの準備にはいくつかの手順を実行する必要があります。

**アップグレードを準備するには**

1. データベースのバックアップを作成します。

   アップグレードを開始する前に、両方の Self Service データベースをバックアップする必要があります。データベースのデフォルト名は NetBackupSelfService と NetBackupSelfServiceNetBackupAdapter です。SQL Server Management Studio で次の手順を実行します。

   - NetBackupSelfService データベースの復旧モデルをメモします。
   - データベースの復旧モデルを[単純]に設定します。
   - データベースのバックアップを作成します。
   - NetBackupSelfServiceNetBackupAdapter データベースの復旧モデルをメモします。
   - データベースの復旧モデルを[単純 (Simple)]に設定します。

- データベースのバックアップを作成します。

2 ポータルをオフラインにします。

Veritas は、アップグレードの実行中はユーザーのログオンとアクティビティを防ぐことをお勧めします。ユーザーのログオンとアクティビティを防ぐ最も良い方法は、IIS (インターネットインフォメーションサービス) マネージャを使用してポータル Web サイトのアプリケーションプールを停止することです。

アプリケーションプールの停止中にユーザーが Web サイトに接続しようとすると、Web ブラウザに「`HTTP Error 503. The service is unavailable`」エラーが表示されます。

アップグレード中に他のアプリケーションプールは停止しないでください。接尾辞 PublicWebServiceAppPool を含むアプリケーションプールを停止すると、アップグレードは失敗します。パブリック Web サービスはアップグレードに使用されます。

# ポータルのアップグレード

ポータルをアップグレードするには

1 Web サーバーで、`NetBackup Self Service Portal 10.1.1.exe` インストーラを実行します。

インストーラが実行され、インストールがコンピュータにコピーされます。インストールが完了すると、コンフィギュレータが起動されます。

2 コンフィギュレータで［NetBackup Self Service ポータルのアップグレード (Upgrade a NetBackup Self Service Portal)］を選択し、［次へ (Next)］をクリックします。

3 ［コンポーネントの選択 (Select Components)］ダイアログで、すべてのコンポーネントが選択されていることを確認して［次へ (Next)］をクリックします。

4 検証ページで IIS が正しく構成されていることの確認が実行されます。

5 アップグレードする正確な［Web サイトの仮想ルート (Website Virtual Root)］と［Web サービスの仮想ルート (Web Service Virtual Root)］の Web サイトを選択します。

アップグレードする正確な Web サイトを選択してください。デフォルトの Self Service インストールでは、4 つの Web サイトの名前は次のとおりです。

- NetBackupSelfService - Web サイトの仮想ルート
- NetBackupSelfServiceNetBackupPanels - この Web サイトは選択しないでください。
- NetBackupSelfServiceNetBackupServices - この Web サイトは選択しないでください。
- NetBackupSelfServicePublicWebService - Web サービスの仮想ルート

6 アップグレードする正確な Windows サービスを選択します。

7 [データベースのアップグレード (Upgrade Database)]ダイアログボックスで、アップグレードするデータベースを選択し、データベースに接続するためのクレデンシャルを指定します。

アップグレードを実行するデータベースユーザーには sysadmin サーバー役割が必要です。このユーザーはアップグレードプロセス中にのみ使用され、コンフィギュレータが完了すると保存されません。

データベース管理者から sysadmin 役割を付与されない場合は、低い権限セットでデータベースのアップグレードを実行できます。詳細情報を参照できます。

p.48 の「データベースをアップグレードするための低いデータベースアクセス権」を参照してください。

8 確認画面で、入力したすべてのパラメータが正しいか確認します。[インストール (Install)]をクリックします。

9 コンフィギュレータがポータルをアップグレードします。

# アダプタのアップグレード

**アダプタをアップグレードするには**

1 Web サーバーで、NetBackup Self Service Adapter 10.1.1.exe インストーラを実行します。

インストーラが実行され、インストールがコンピュータにコピーされます。インストールが完了すると、コンフィギュレータが起動されます。

2 コンフィギュレータで[NetBackup Self Service アダプタのアップグレード (Upgrade NetBackup Self Service Adapter)]を選択し、[次へ (Next)]をクリックします。

3 [コンポーネントの選択 (Select Components)]ダイアログボックスですべてのオプションを選択したままにして、[次へ (Next)]をクリックします。

4 検証画面が実行され、PowerShell がインストールされて有効になっているか確認されます。

5 アップグレードする正確な[ポータルパネルの仮想ルート (Portal Panels Virtual Root)]と[Web サービスの仮想ルート (Web Services Virtual Root)]の Web サイトを選択します。

6 検証画面が実行され、ポータル Web サービスに接続でき、ポータルがアップグレードされたことが確認されます。

7 ［データベースのアップグレード (Upgrade Database)］ダイアログボックスで、アップグレードするアダプタデータベースを選択し、データベースに接続するためのクレデンシャルを指定します。

アップグレードを実行するデータベースユーザーには sysadmin サーバー役割が必要です。このユーザーはアップグレードプロセス中にのみ使用され、コンフィギュレータが完了すると保存されません。

DBA (データベース管理者) から sysadmin 役割を付与されない場合は、低い権限セットでデータベースのアップグレードを実行できます。詳細情報を参照できます。

p.48 の「データベースをアップグレードするための低いデータベースアクセス権」を参照してください。

8 検証画面が実行され、データベースに接続可能であることが確認されます。

9 確認画面が表示されます。パラメータが正しいか確認し、［インストール (Install)］をクリックしてアップグレードを実行します。

# サイレントアップグレード

NetBackup Self Service をアップグレードしようとする前に、NetBackup Self Service が現在のコンピュータにインストールされていることを確認します。

**NetBackup Self Service をサイレントアップグレードするには:**

1 NetBackup Self Service データベースのバックアップコピーを作成します。デフォルトで、コピーの名前は NetBackupSelfService と NetBackupSelfServiceNetBackupAdapter になります。コマンドラインまたは SQL Management Server からバックアップを作成します。

2 サイレントアップグレードでは、既存の NetBackup Self Service インストールから必要なすべての情報を収集できます。アップグレードを起動する前に何も構成する必要はありません。

*install_directory*¥Silent Files¥Silent Upgrade.bat を右クリックし、［管理者として実行］を選択します。アップグレードが開始され、コマンドラインウィンドウにアップグレードの進捗状況が表示されます。アップグレードが完了すると、コマンドラインウィンドウが閉じます。

コマンドラインからサイレントアップグレードを直接起動することもできます。コマンドプロンプトを開き、SilentUpgrade.bat ファイルを含むディレクトリに変更してから、SilentUpgrade.bat を実行します。

アップグレードログファイル log_*timestamp*_upgrade.log が、SilentUpgrade.bat ファイルと同じディレクトリに生成されます。このファイルでアップグレードの結果を確認します。ファイルの末尾に Upgrade succeeded と表示されている場合、アップグレードは成功です。Upgrade failed と表示されている場合、アップグレードは失敗です。アップ

グレードが失敗した場合は、アップグレードログにトラブルシューティング情報が記載されています。

# 検証

**アップグレードを検証するには:**

1. ポータルアプリケーションプールを開始して、Web サイトをオンラインにします。
2. ポータルにログインします。
3. 検証手順を実行して正しくインストールされていることを確認します。

   p.32 の「インストール後の検証について」を参照してください。
4. ライセンスが正しいか確認します。

## ライセンスの確認とリクエストタイプコードの変更の確認

リクエストタイプは NetBackup Self Service 内で処理を実行するために使用されます。NetBackup Self Service ライセンスでは、最大 22 個のアクティブなリクエストタイプを使用できるように指定されています。デフォルトでは、アップグレード後のシステムには 17 個のリクエストタイプがあります。Web サイトで[管理 (Admin)]、[リクエストおよび承認 (Request & Approval)]、[リクエストタイプ (Request Type)]の順に選択して、Self Service のリクエストタイプを表示できます。

リクエストタイプは、主要なダッシュボードのソリューションに関連する 2 つの大きなカテゴリに分割されます。無効化できないリクエストタイプと、デフォルトのリクエストタイプのカテゴリです。

**表 4-2　無効化できないリクエストタイプ**

| 名前 | コード |
|---|---|
| テナントの追加 (Add Tenant) | NEWTENANT |
| vCloud Director インポートの追加 (Add vCloud Director Import) | NEWVCLOUD |
| 新しいコンピュータのユーザー (New Computer User) | NEWMACUSER |
| vCloud Director パスワードの設定 (Set vCloud Director Password) | VCLOUDPWD |

表 4-3　ダッシュボードのエンドユーザー操作に関連付けられているデフォルトのリクエストタイプ

| 名前 | コード |
|---|---|
| 今すぐバックアップ (Backup Now) | DBBACKUPNOW |
| 保護 (Protect) | DBNEWBACK |
| ファイルのリストア (Restore File) | ALFRORIG |
| ファイルのリストア (Restore File) | DBRESTFILE |
| 代替 VM へのファイルのリストア (Restore File to Alternate VM) | ALFRALT |
| 仮想マシンのリストア (Restore Virtual Machine) | DBRESTVM |
| クラウド資産のリストア (Restore Cloud Asset) | DBRESTCLD |
| 保護解除 (Unprotect) | DBREMBACK |
| Oracle バックアップのリストア (Restore Oracle Backup) | DBRESTORA |
| SQL Database のリストア (Restore SQL Database) | DBRESTSQL |
| ファイルリストア用の VM 登録 (Register VM for File Restore) | DBREGDNS |
| VM ディスクのリストア (Restore VM Disks) | VMDISKREST |

表 4-2と、表 4-3のすべてのリクエストタイプが有効であることを確認します。

アップグレードの一環として、これら 5 つのリクエストタイプの現在のバージョンがインストールされます。既存のリクエストタイプはディスクにエクスポートされ、*install_location*¥MsBuild¥DataExport ディレクトリに格納されます。[統合設定 (Integration Settings)]と[アクションリクエストタイプ (Action Request Types)]セクションはデフォルトのリクエストタイプにリセットされます。ローカルでカスタマイズされたリクエストタイプを確認し、必要に応じて新しいリクエストタイプを更新または置換します。

現在 NetBackup Self Service でデフォルトで使用されているリクエストタイプは上記のみです。その他の出荷時のリクエストタイプは、アップグレード時に無効化されます。[管理 (Admin)]、[リクエストおよび承認 (Request & Approval)]、[リクエストタイプ (Request Type)]の順に選択して、それらの状態を確認してください。

# アップグレード後の再同期

アップグレード後に、クラウドを使用している場合は NetBackup と vCloud Director 間でデータを手動で再同期します。1 日に 1 回、システム同期と資産のインポートの 2 つのスケジュール設定されたタスクが実行されます。システム同期は、すべてのバックアップサーバーから新しいバックアップイメージをインポートし、古いバックアップイメージを期限切れにして使用量を計算します。これらのタスクが実行されるまで、ユーザーに表示されるデータは不完全な可能性があります。

データを再同期するには

1. 管理者として Web サイトにログインし、[監視 (Monitoring)]タブに移動します。画面の左側にスケジュール設定されたタスクが表示されます。
2. [システム同期 (System Sync)]タスクの横にある歯車をクリックし、[今すぐ実行 (Run Now)]を選択します。
3. (条件付き) vCloud Director を使用する場合は、[資産のインポート (Asset Import)]タスクの横にある歯車をクリックし、[今すぐ実行 (Run Now)]を選択します。
4. 画面の右側の[アクティビティ (Activity)]セクションで、これらのタスクの進捗状況を監視します。

これらの手順を手動で実行しない場合、タスクは自動的に夜間に実行されます。

# アップグレード後の手順

アップグレードが完了したら、すべてのマスターサーバーの接続性チェックを完了します。

Veritas では、すべてのデータの再同期化もお勧めします。

アップグレードの一環として、2 つのデータベースがバックアップされ、復旧モデルが[単純 (Simple)]に設定されています。データベースの復旧モデルを初期値に戻します。

データベースを初期値に戻すには:

1. 両方のデータベースを圧縮します。
2. データベースの復旧モデルを元の値に戻します。

アップグレードを実行すると、新しい一連のコードがサーバー上の新しい場所に配置されます。アップグレードが完了したら、古いインストールを削除します。

古いインストールコードを削除するには

1. [プログラムの追加と削除]に移動します。
2. 次のコンポーネントの以前のバージョンをすべてアンインストールします。
   - NetBackup Self Service ポータル
   - NetBackup Self Service アダプタ

# ロールバック

以前のバージョンに戻すには、2 つの NetBackup Self Service データベースのリストアが必要です。さらに、以前のポータルとアダプタを再インストールするか、バックアップから Web サーバーをリストアする必要があります。

ポータルとアダプタを再インストールする場合は、インストール時に[コンポーネントの選択 (Select Components)]ダイアログボックスで[データベース (Database)]が選択されていないことを確認します。どちらの場合も、データベースはリストアされ、再インストールする必要はありません。

ポータルの再インストール中にアプリケーションキーの入力を求めるメッセージが表示されたら、以前のインストールのアプリケーションキーを入力します。このアプリケーションキーは、リストアされたデータベースでサードパーティのパスワードの暗号化に使用されるキーで、以前のバージョンを配備した際に記録されています。

5

# インストール後の検証

この章では以下の項目について説明しています。


- インストール後の検証について
- 目視での確認
- 構成のチェック
- IIS 構成のチェック
- Windows サービス


## インストール後の検証について

インストールが完了すると、一連の確認を行ってインストールを検証できます。

表 5-1　NetBackup Self Service 検証チェックリスト

| 検証 | 追加情報 |
|---|---|
| Web サイトのメイン画面を目視で確認します。 | p.32 の「目視での確認」を参照してください。 |
| NetBackup Self Service コンポーネントの構成の確認を実行します。 | p.33 の「構成のチェック」を参照してください。 |
| Windows サービスが正しく構成されていることを確認します。 | p.35 の「Windows サービス」を参照してください。 |

## 目視での確認

インストール後は、システムが正しくインストールされているかを確認することが重要です。ポータル Web サイトにログオンします。Web サイトのメイン画面が正しく表示されることを確認します。

# 構成のチェック

インストール後に、[構成のチェック (Configuration Check)]画面 ([管理 (Admin)]、[サポート (Support)]、[構成のチェック (Configuration Check)]の順に移動) を使用して、システムが正しく構成されていることを確認します。

## [サーバー (Server)]タブ

- [Windows サービス (Windows Service)]: Self Service データベースに接続されている Windows サービスの状態を表示します。各 Windows サービスは、5 分ごとにハートビート情報をデータベースに書き込みます。データベースが 7 分以内にハートビートを受信していない場合、サービスは赤で強調表示されます。

  環境がアップグレードの場合は、[Windows サービスレコードのクリア (Clear Windows Service Records)]ハイパーリンクをクリックする必要がある場合があります。赤色のテキストで、[停止 (Stopped)]状態の以前のインストールへの参照が表示される場合があります。

  1 つのデータベースに複数の Windows サービスを接続してシステムを構成できます。これは、冗長性を持たせるために便利な構成です。各 Windows サービスは、Windows サービステーブルに 3 つのレコードを書き込みます。たとえば 2 つの Windows サービスがある場合、6 つのレコードが表示されます。

- [ユーザー定義のタスクプラグイン (Custom Task Plugins)]: タスクエンジンに接続されているユーザー定義のタスクを表示します。テーブルには NetBackup Self Service タスク用の行が 1 つあります。タスクの状態は[ロード済み (Loaded)]です。

- [データベース (Database)]: データベースのバージョンとデータベースの最新の変更を表示します。これらのフィールドは、サポートシナリオで役立ちます。

- [Web サーバー (Web server)]: 重要なフィールドは[Web ルートアドレス (Web Root Address)]です。このフィールドは、システムのユーザーから見た Self Service のホームページの URL である必要があります。この設定は、NetBackup Self Service へのハイパーリンクを記載する電子メールを構築するときに使用されます。

- [パブリック Web サービス (Public web service)]: パブリック Web サービスの URL が正しくない場合、Web ページにエラーメッセージが表示されます。

- [テーブル (Table)]: ページの下部に表示されるテーブルには、システム内のすべてのコンポーネントのバージョン番号、接続文字列、アプリケーションの暗号化の状態が表示されます。すべてのバージョン番号と接続文字列が一致する必要があります。一致しない場合は、エラーメッセージが表示されます。アプリケーションキーが正しくない場合、アプリケーションの暗号化の状態にこの問題が示され、エラーが表示されます。

## [基本設定 (Base Settings)]タブ

Self Service の基本設定が適切であることを確認します。

- ［システム言語 (System Language)］ - サポートされている言語オプションは英語 (US-English) のみです。
- ［システムタイムゾーン (System Time Zone)］ - 大多数のユーザーが許容できるデフォルトのタイムゾーンを選択します。
- ［イメージのアップロード (Image Upload)］ - イメージアイコンをクリックしてイメージマネージャを開きます。イメージマネージャに `UploadedImages` フォルダが一覧表示されます。`UploadedImages` フォルダを選択し、［アップロード (upload)］をクリックします。イメージファイルを参照してファイルをアップロードします。ファイルが正常にアップロードされると、［イメージマネージャ (Image Manager)］ダイアログの右側にイメージが表示されます。

### ［電子メール (Email)］タブ

- 送信メールの SMTP 設定を構成するには、［SMTP 設定の編集 (Edit SMTP Settings)］をクリックします。
- システム用の主要な電子メールアドレスを確認します。
- テスト電子メールを送信します。Self Service システムからテスト電子メールを送信するには［テスト電子メールの送信 (Send Test Email)］をクリックします。電子メールを送信するには、Windows サービスがアクティブで、電子メールタスクが有効で、SMTP 設定が正しい必要があります。
- 電子メールキューを確認します。キューに登録された電子メールを表示するには、［電子メールキュー (Email Queue)］をクリックします。電子メールキューには、電子メールの送信で発生したエラーが表示されます。メールが正常に送信されるとキューから削除されます。

### 統合設定

インストールの完了後に統合設定を検証します。

- ［管理 (Admin)］、［統合設定 (Integration Settings)］の順に選択します。
- パネル URL とサービス URL に同じホスト名が使用されていることを確認します。
- URL が HTTPS で始まっていることを確認します。
  例:

```
https://example.com/NetBackupSelfServiceNetBackupPanels
https://example.com/NetBackupSelfServiceNetBackupServices
```

## IIS 構成のチェック

インストール後、IIS が正しく構成されていることをチェックします。［スタート］メニューで［インターネット インフォメーション サービス］を検索します。

- ［インターネット インフォメーション サービス］、［サイト］、［既定の Web サイト］、［バインド］の順に選択して、インストーラが SSL 証明書を作成したことを確認します。
- ［インターネット インフォメーション サービス］、［サイト］、［既定の Web サイト］、［バインド］の順に選択して、ポート443 へのバインドが作成され、証明書が割り当てられていることを確認します。

# Windows サービス

インストール後は、Windows サービスが正しく動作していることを確認してください。Windows サービスがインストールされているサーバーで以下を行います。

- イベントビューアを開き、アプリケーションログに移動します。
- DirectaService9.4$NetBackupSelfService のソースを含むメッセージを検索します。名前はわずかに異なる場合があります。命名規則はDirectaService9.4$*SiteName* で、*SiteName* は Web サイトの名前です。
- Windows サービスがエラーをログに記録した場合は、構成に問題がある可能性があります。エラーの詳細を調べます。

一般的な構成の問題は、Windows サービスがデータベースに接続できないことです。Windows サービスは、データベースへの接続が構成ファイルで定義されているかを確認します。サービスがデータベースに接続できない場合、Windows イベントログにエラーが記録されます。

6

# アンインストール

この章では以下の項目について説明しています。

- NetBackup Self Service のアンインストール

## NetBackup Self Service のアンインストール

アンインストール処理では、インストール場所に接続されている Windows サービス、Web サイト、パブリック Web サービスが削除されます。その後、ハードディスク上のソフトウェアとスタートメニューショートカットが削除されます。

アンインストールしても、作成された 2 つのデータベースは削除されません。データベースは手動で削除する必要があります。

**NetBackup Self Service をアンインストールするには**

1. アンインストールする NetBackup Self Service のバージョンを決定します。
2. [Veritas Front Office Service 9.6 (NetBackupSelfService)] サービスを見つけて停止します。
3. Windows で[プログラムと機能]を開きます。
4. [NetBackup Self Service アダプタ バージョン]を検索し、[アンインストール]を選択します。
5. [NetBackup Self Service ポータル バージョン]を検索し、[アンインストール]を選択します。

アンインストール処理が完了したら、SQL Server Management Studio 内からデータベースを削除します。[オブジェクトエクスプローラー]で[データベース]ノードを展開します。関連する各データベースを右クリックし、[削除]を選択します。

A

# ソフトウェア要件

この付録では以下の項目について説明しています。

- Self Service 向けの NetBackup ソフトウェア要件

## Self Service 向けの NetBackup ソフトウェア要件

最新の Service Pack を含む NetBackup 8.0 以降が必要です。Windows マスターサーバーでは、英語 (米国) のオペレーティングシステムと NetBackup のコードページインストールのみがサポートされます。NetBackup 言語パックはサポートされません。

UNIX マスターサーバーでは、マスターサーバーのオペレーティングシステムの文字エンコードは UTF-8 にする必要があります。複数のロケールがサポートされます。NetBackup 言語パックもサポートされます。

NetBackup Appliance もサポートされます。

### Self Service のソフトウェア要件

Self Service のソフトウェア要件は次のとおりです。

- vCloud Director 統合構成を使用する場合は、ソフトウェア互換性リストでサポートされている API バージョンを確認します。
  http://www.netbackup.com/compatibility
- サポート対象のオペレーティングシステムのいずれかがインストールされていれば、NetBackup Self Service は Hyper-V や vSphere などの任意の仮想プラットフォームで動作します。

次に示すリストで、サポート対象のオペレーティングシステム、SQL Server、Web ブラウザを定義します。最新の Service Pack を常に使用する必要があります。

---

**メモ:** サポート対象として表示されていないオペレーティングシステム、SQL Server、Web ブラウザのバージョンはサポート対象外と見なされます。

---

サポート対象のオペレーティングシステム:

- Windows Server 2012 R2
- Windows Server 2016
- Windows Server 2019

サポート対象の SQL Server:

- SQL Server 2014
- SQL Server 2016
- SQL Server 2017
- SQL Server 2019
- Azure SQL Database
- Amazon RDS 上の SQL Server

サポート対象ブラウザ:

- Internet Explorer 11
- Edge
- Firefox
- Chrome
- Safari (サポート対象ですが、非推奨です)

B

# トラブルシューティング

この付録では以下の項目について説明しています。


- PowerShell 実行ポリシーについて
- 失ったアプリケーションキーのリカバリ

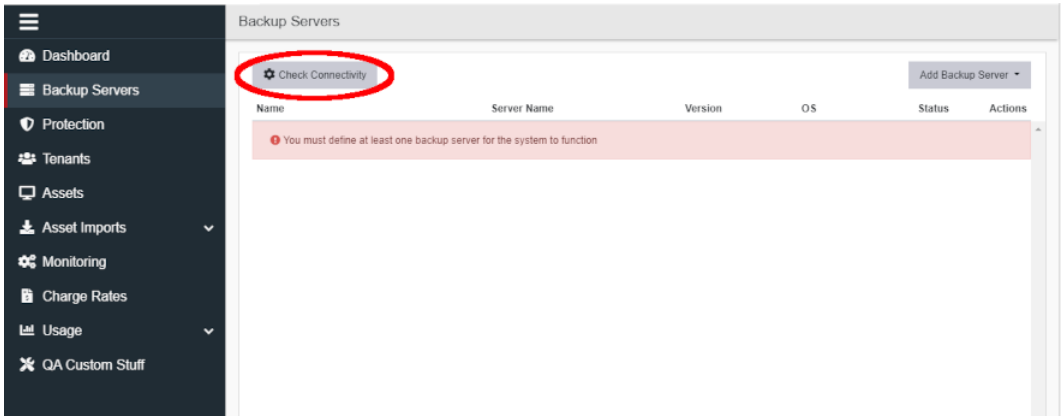

## PowerShell 実行ポリシーについて

PowerShell 実行ポリシーにより、PowerShell がスクリプトを実行できるかどうかを決定します。インストーラが実行ポリシーを[RemoteSigned]に設定することで、スクリプトの実行が許可されます。インストーラでこの手順が失敗するか、インストール後に実行ポリシーが変更された場合、問題が発生します。この付録では、実行ポリシーの問題の診断と解決について説明します。

### 診断

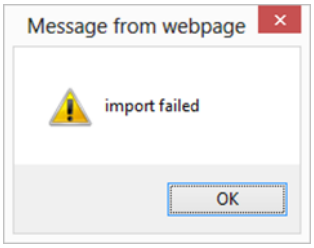
- Web サイトにログオンします。
- [場所 (Location)]タブをクリックします。
- [接続の確認 (Check Connectivity)]アイコンをクリックします。

**図 B-1　　接続の確認**




次のようなエラーメッセージが表示された場合は、実行ポリシーに問題がある可能性があります。[接続の確認 (Check Connectivity)]でエラーが生成されない場合、実行ポリシーは正しく設定されます。

**図 B-2　　インポートに失敗した場合のポップアップボックス**




実行ポリシーの問題を確認するには、エラーログに移動します。[管理 (Admin)]、[サポート (Support)]、[エラーログ (Error Log)]の順に選択し、エラーを確認します。実行ポリシーの問題の例を次に示します。

```
"CreateRequest failed with error:
File
C:¥Temp¥NetBackupAdapter¥NetBackupAdapterServices¥PowerShellScripts¥
ValidationHook¥Initial.p s1 cannot be loaded because running scripts
 is
disabled on this system. For more information, see
about_Execution_Policies
at http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkID=135170. File C:¥Temp
¥NetBackupAdapter¥NetBackupAdapterServices¥PowerShellScripts¥ValidationHook¥
Initial.p s1 cannot be loaded because running scripts is disabled on
```

```
 this
system. For more information, see about_Execution_Policies at
http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkID=135170."
```

### 解決方法

1. Web サーバーにログオンします。
2. 管理者として PowerShell コマンドプロンプトを開きます。
3. `Get-ExecutionPolicy -List` と入力します。

   現在の実行ポリシーのリストが表示されます。
4. [LocalMachine]のスコープが[RemoteSigned]に設定されていない場合は、次のコマンドを入力します。

   ```
   Set-ExecutionPolicy -Scope LocalMachine -ExecutionPolicy
   RemoteSigned
   ```

実行ポリシーのスコープは、リストの上位にある項目の優先度を高く扱い、リストの下位にある項目を上書きします。スコープ[MachinePolicy]が[Restricted]に設定されている場合、[LocalMachine]が[RemoteSigned]に設定されていてもスクリプトは実行できません。次の Stack Overflow の投稿で、このような問題を解決する方法が説明されています。

http://stackoverflow.com/a/27755459

## 失ったアプリケーションキーのリカバリ

アプリケーションキーは、システムの正しい操作にとって重要です。アプリケーションキーが失われた場合は、サードパーティのパスワードをリカバリできません。ログオンには影響しませんが、アダプタのパスワードと統合設定を再入力する必要があります。

アプリケーションキーを実際に失う方法は 2 つあります。

- Web サーバーで障害が発生した場合
- Web サイトがアンインストールされた場合

1 つ目の問題を緩和するには、Web サーバーのバックアップを保持する必要があります。

2 つ目の問題の例は、Web サーバーを別の物理コンピュータに移動する必要がある場合です。古いサーバーの構成ファイルからアプリケーションキーをコピーし、そのアプリケーションキーを使用して新しい Web サイトをインストールする必要があります。新しいサーバーが正しく動作することをテストし、サーバーの有効なバックアップがあることを確認します。インストールが完了したら、古いサーバーから Web サイトをアンインストールします。

アプリケーションキーとデータベース接続文字列は、コンポーネントの構成ファイルの暗号化セクションに格納されます。構成ファイルの復号および暗号化には、次の 2 つのスクリプトを使用できます。

- *install_location*¥MsBuild¥ConfigEncrypt.bat
- *install_location*¥MsBuild¥ConfigDecrypt.bat

暗号化および復号されるファイルは次のとおりです。

- *install_location*¥WebSite¥web.config
- *install_location*¥PublicWebService¥web.config
- *install_location*¥ServiceHost¥DirectaSvcHost.exe.config

C

# デフォルトの HTTPS 構成

この付録では以下の項目について説明しています。


- デフォルトの HTTPS 構成について


## デフォルトの HTTPS 構成について

インストールでは、デフォルトで HTTPS を使用するようにサイトが構成されます。インストールではデフォルトで自己署名証明書が追加され、HTTPS バインドが作成されます。

D

# 負荷分散インストール

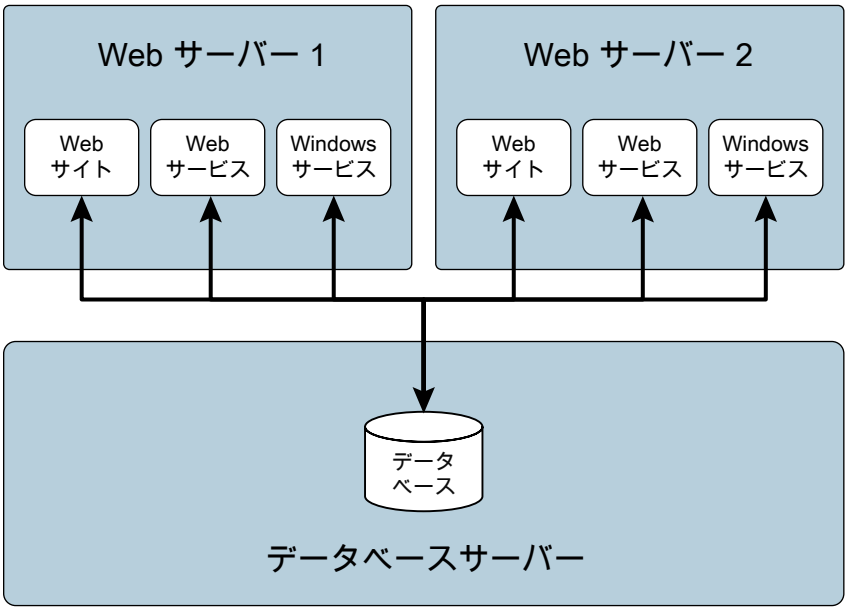
この付録では以下の項目について説明しています。

- 負荷分散インストールについて

## 負荷分散インストールについて

負荷分散インストールではデータベースサーバーとデータベースは 1 つですが、Web サイト、Web サービス、Windows サービスには複数のインスタンスがあります。この構成により負荷分散と冗長性を実現します。

**図 D-1** 負荷分散インストールの例



インストールは、任意の Web サーバーまたはアプリケーションサーバーで実行できます。インストール処理では必要なすべてのファイルがサーバーにコピーされます。コンフィギュレータの段階では、インストールまたはアップグレードするコンポーネントを選択できます。たとえば、Windows サービスをホストするアプリケーションサーバーを構成する場合は、Windows サービスのみを構成するように選択します。

負荷分散インストールを作成する場合、すべてのコンポーネントを同じアプリケーションキーでインストールする必要があります。システムの最初のインストールで、新しいアプリケーションキーを生成します。以降のインストールでは、新しいキーを生成するのではなく、アプリケーションキーをコピーしてください。アプリケーションキーに関する詳細情報を参照できます。

p.41 の「失ったアプリケーションキーのリカバリ」を参照してください。

E

# イメージのアップロードのカスタマイズ

この付録では以下の項目について説明しています。


- イメージのアップロードのカスタマイズについて


## イメージのアップロードのカスタマイズについて

イメージのアップロードは自動的に構成されます。アップロードされたイメージは、デフォルトでは `C:¥inetpub¥Veritas¥Images` に格納されます。負荷分散インストールでは、ユーザーがシステムにアップロードするイメージをすべての Web サーバーで共有する必要があります。アップロードされたイメージが共通のネットワークストレージ領域に存在するように構成する必要があります。このセクションでは、ストレージの場所を変更する方法について説明します。

**ストレージの場所を変更するには**

1. IIS (インターネットインフォメーションサービス) マネージャを起動します。
2. NetBackup Self Service アプリケーションに移動します。
3. ビューを展開し、`UploadedImages` 仮想ディレクトリを見つけます。
4. ［仮想ディレクトリの管理 (Manage Virtual Directory)］を右クリックし、［詳細設定 (Advanced Settings)］を選択します。
5. ［物理パス (physical path)］テキストボックスに、仮想ディレクトリをディスク上に配置する場所のパスを入力します。アップロードされたイメージがこのパスに格納されます。パスは、ローカルサーバー上 (`C:¥uploadedimages` など) または UNC 共有 (`¥¥myshare¥uploadedimages` など) のいずれかのパスにできます。

6 デフォルトでは、物理ディレクトリへの接続はパススルー認証に設定されています。UNC 共有を選択した場合は、[物理パスのクレデンシャル (Physical Path Credentials)]、[特定のユーザー (Specific User)]の順にクリックし、クレデンシャルを入力します。

7 どちらのシナリオでも、接続クレデンシャルには物理的な場所への読み取りおよび書き込みアクセス権が必要です。

イメージが正しくアップロードされることを検証するには

1 管理者として Web サイトにログオンします。

2 [管理 (Admin)]、[サポート (Support)]、[構成の確認 (Configuration Check)]、[基本設定 (Base Settings)]の順に移動します。

3 イメージアイコンをクリックします。

4 イメージマネージャに `UploadedImages` フォルダが一覧表示されます。

5 `UploadedImages` フォルダを選択し、アップロードアイコンをクリックします。

6 イメージファイルを参照してアップロードします。イメージが正常にアップロードされると、[イメージマネージャ (Image Manager)]ダイアログボックスの右側にイメージが表示されます。

F

# データベースをアップグレードするための低いデータベースアクセス権

この付録では以下の項目について説明しています。


- データベースをアップグレードするための低いデータベースアクセス権


## データベースをアップグレードするための低いデータベースアクセス権

データベースをアップグレードする際は、データベースのアップグレードを実行するためのデータベースログオンを選択する必要があります。最も簡単な選択は、「sysadmin」役割を持つユーザーの使用です。

データベース管理者 (DBA) から sysadmin 役割を付与されない場合は、低い権限セットでデータベースのアップグレードを実行できます。この付録では、低いアクセス権でのアップグレードプロセスについて説明します。

次の SQL スクリプトは、データベースのアップグレードに適したログオン UpgradeUser を作成します。

**アップグレード用に低い権限を持つユーザーを作成するには**

1. SQL Management Studio でこのスクリプトを実行して、データベースのアップグレードに適したログオンおよびユーザーを作成します。
2. コンフィギュレータを実行してアップグレードするデータベースを選択するとき、次のように選択します。
   - 認証モード: Sql

- DB ユーザー: UpgradeUser
- DB パスワード: *password*

3 UpgradeUser はアップグレードプロセス中にのみ使用するため、インストールが完了したら無効にするか削除できます。

```
-- Create a login for upgrading the database
use master
Create Login UpgradeUser WITH PASSWORD = 'password', Check_Policy =
 OFF
GO

-- Make a database user for the login
-- and give them db_owner role on the target database
USE NetBackupSelfService
CREATE USER UpgradeUser FOR LOGIN UpgradeUser
GO
ALTER ROLE db_owner ADD MEMBER UpgradeUser
GO

-- Allow ownership of database to be transferred to sa.
-- The sa login can be disabled as per good dba practice,
-- and everything will still work ok.
use master
GRANT IMPERSONATE ON LOGIN::sa to UpgradeUser
```